

『看護師のための不穏・暴力対処マニュアル
[Web 動画付]』

怯えるのではなく，予防し 軽減するための手引き書

編：本田明／定価：本体 2,600 円＋税／発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



私が長年取り組んでいるテーマは、看護における「安楽」なケアである。不穏や暴力は患者の安楽と対極にあるが、どのような内容なのだろうかと思いつつ、本書のページをめくった。すると、「まえがき」には、「殴る・蹴るのみならず、怒鳴ったり、ハラスメントも、人としての尊厳を踏みにじる行為で暴力であり、医療従事者は守られるべきである。患者の暴力は精神症状によるものがあり、認知症やせん妄による興奮は、精神科以外の診療科でも避けられない精神症状である」といった記述があり、本書の対象が精神科ナースに限定していないことが読み取れた。

本書では、総論として「暴力を起こす患者の心理」「不穏・暴力の対処手技使用の前提となるプロセス」などが述べられ、各論では、事例をあげて暴力と不穏時の対処方法を紹介している。「カテテル類を自己抜去しようとしているとき」など、精神科に限らず一般病棟でも遭遇する場面への対応が具体的に紹介され、Web で動画を観ることもできる。

だが、何より本書を通読して印象的だったのは、著者が繰り返し、「いきなり各論にあるような手技を使用することはほとんどない。さまざまなアプローチを行い、それらが無効な場合に初めて手技を使用する」と述べていることである。そして、「暴力は予防できる」と強調し、「暴力や攻撃性へ

の対応の第一選択はディエスカレーション（言語的・非言語的なコミュニケーション技法にて攻撃性や怒りなどの軽減をはかる技術）であり、身体的介入は最終手段」「暴力が発生したとき、ほとんどはディエスカレーションや人手を呼ぶことによりおさまる」と、患者の暴力や不穏を、予防し軽減する対応の必要性をていねいに説明している。各論には、「身体拘束」についての記述もある。だが、「身体拘束」については、「身体拘束の弊害は重大であり、まずは不穏・暴力の原因を明らかにし、可能な限り原因の除去に努め、代替方法を試みるのが原則。代替方法は、環境調整、心理的介入、苦痛を伴う治療法の見直し、薬物投与による科学的鎮静などの検討が優先されるべきである」「他に代替方法がない場合にのみ、最小限の実施とする」と、慎重に用いる必要があることが強調されている。

暴力や不穏、その強い攻撃性に怯えるのではなく、予防し軽減する。本書にて、看護の原則ともいべき、「患者をていねいにアセスメントし、いかに、苦痛で不快な状況を回避するか」をあらためて考えた。そして、それこそが患者への安楽へとつながることなのである。本書は精神科看護に携わる方のみならず、看護教員を含め広く看護職に手に取ってほしい一冊である。